組織並に活動に關する一般運動方針決定の件

（本部提出）

第一節　客觀的情勢

一、一般的情勢

（1）日本資本主義の特質とその現勢

○

日本の資本主義は、最近の二三十年間に急速なる發展を遂げた。特にそれは、一九一四年――一九一八年の世界大戰に際して、躍進的發展を遂げ、現在では、東洋に於ける第一級の帝國主義國として、ヨーロッパおよびアメリカの帝國主義列强と共に、植民地、半植民地の搾取に猛進してゐる。しかも日本の資本主義は、諸多の帝國主義列强のそれよりは遙かに强烈なる程度に、國內の無產大衆の勞働力を搾取してゐるのである。

○

日本の資本主義は、最初から、極度に帝國主義的色彩を帶びてゐた。それは、畢竟するに、日本の資本主義が、極めて薄弱なる自然的基礎の上に立つてゐる事の結果である。日本の國內には、もともと、充分なる資源がない。石炭、殊に石油の產出が極めて少く、鐵の產出が殆んど無い。更に生糸以外には纖維工業の原料が產出されない。かゝる薄弱なる自然的基礎の上に立つ日本の資本主義は、必然的に帝國主義的方向を辿らざるを得ないのである。歷史は、日本の資本主義が常にアジア大陸への帝國主義的××と國內の無產大衆の勞働力の極端なる搾取とを條件として發展し續けて來たものであることを明瞭に示してゐる。

○

一九一四年――一九一八年の世界戰爭は、日本の資本主義に躍進的發展の機會を與へた。日本の資本主義は、世界戰爭への比較的僅かな參加によつて、中立國としての經濟的利益と參加國としての政治的利益とを共に得た。日本の資本主義は、たしかに躍進的發展を遂げた。そして、その頃から、資本の集中、產業および銀行資本の金融資本への集中、トラスト化、コンツエルン化、等々の傾向も、急速なる進行を示し始めた。日本の資本主義は、かくして、東洋に於ける第一級の帝國主義國としての實質を具へるに至つたのである。

○

だが、さうした躍進的發展にも拘らず、日本資本主義の本來の弱點は、決して除去されはしなかつた。そしてそのために、日本の資本主義は、世界戰爭終了後、歐洲列强資本主義の回復とアメリカ資本主義の加速度的發展とに挾擊されて、極度の不安定ぶりを示し始めた。大正九年に於ける第一次の恐慌、大正十二年（震災後）に於ける第二次の恐慌、更に、昭和二年度に於ける第三次の恐慌（銀行恐慌）等々。戰後に於ける日本の資本主義は、恐慌から恐慌へとよろめき歩いてゐるのである。

○

資本家地主の專制政府は、國內の無產大衆の利益を極度に犧牲にすることによつて、それら數度の恐慌を、わずかに切り拔けて來た。殊に昭和二年度の恐慌に際しては、約十億の負擔を民衆に强課することによつて、わずかにその危機を脫することを得た。だが、結局それは、日本資本主義の內在的矛盾を倍加せしめたに過ぎない。

○

國內無產大衆の購買力の極度の減退、海外貿易の不振――これは支那に於ける反帝國主義運動の進展の結果である――等々のために、所謂『產業の極度の不振』が招來され、しかも彼等が昭和二年の恐慌切ぬけ策として考へ出した日銀補償法の結果として、中央銀行の金融統制力が減退し、ために金利の低落を如何ともし難く、金融ブルジョアジーは、今や數億の遊資を抱へて四苦八苦の態である。かくして彼等は、現下の局面を打開するために、今や金解禁を斷行しやうとしてゐるのである！　無論、金解禁――金本位制の回復は、既に世界の帝國主義諸列强の凡てが、金本位制を回復し終へてゐる今日、世界資本主義の一環として存在してゐる日本資本主義が、遲かれ早かれ斷行せざるを得ない事柄である。だが、今日、資本家地主の政府が、『如何なる犧牲を忍んでも』それを斷行しやうとしてゐるのは、言ふまでもなく、金融ブルジョアジーの當面の利害が、それを痛切に要求してゐるからである。

○

金解禁の結果はどうなるか？　先づ金融ブルジョアジーは彼等の遊資を海外に輸出することによつて相當の利益を獲得する。それと共に彼等は、國內の金利を引上げることに成功するであらう。これは、彼等にとつては、二重の利益である。だが、さうしたことの當然の結果は現在より、より、一層深刻なる不景氣の招來である。そして現在に於てすら既に行詰つてゐる中・小・產業資本が、やがて續々倒潰するであらうことは、今から明かである。そしてその結果が尨大なる失業者群の擧出だ！　しかもそれは必然に所謂『勞働人口の過剩』となり、結局、全產業の上に於ける全勞働者への賃銀の値下と